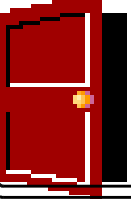


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和5年1月13日 文責 渡邊

自律する子の育て方

自律する子を育てることは大切なことなのですがどうすればよいのでしょうか？

今回は、工藤勇一氏と青砥瑞人氏共著『最新の脳研究でわかった！自律する子の育て方』(2021年5月 SBクリエイティブ株式会社)を参考に、考えてみたいと思います。

子どもに手をかけすぎる大人たち

なぜ、日本では当事者意識のない子どもたちが育つのでしょうか。

それは教育を含め、日本の社会全体がサービス産業化してしまったからだと考えます。私たち大人はとにかく子どもたちに手をかけすぎです。手をかければかけるほど子どもは自律できなくなり、自分がうまくいかないことを誰かのせいにしてしまいます。(中略)

サービスを過剰に与えられて育った子どもは何か課題に直面したとき「この状況を自分でどうにかしよう」という発想が湧いてきません。ひたすら「より良いサービス」を求め、そこで満足するサービスが受けられないと今度は「サービスの質」に不満を言います。

どこかの家庭でありそうな日常の朝の様子を紹介します。

毎朝なかなか起きてこない娘を心配して起こしにいくお母さんの姿があります。

母「朝だよ。起きなさい」

娘「……」

母「いい加減に起きなさい。遅刻しても知らないよ」

娘「あーうるさい。ほっといて」

母「じゃあ、ほんとに知らないよ」

娘「うるさい、うるさい」

そして、遅刻する時間をとくに過ぎて娘が起きてきて、

娘「なんで起こしてくれないのよ。遅刻しちゃったじゃない」

母親の起こしてあげようとするサービスに慣れた娘が、母親のサービスの質に文句を言う。子どもは与えられることに慣れてしまうと、万事がこんな感じです。

日本の学校では次のような発言をする生徒が目立ちます。

「あの先生の教え方が悪いから自分は勉強ができないんだ」

「あの担任のせいでうちのクラスは仲が悪いんだ」

「この学校の支援の仕方が悪いから、僕はクラスに馴染めないんだ」

繰り返しになりますが、自律できない子どもは上手くいかないことが起きると、人のせいにしがちです。そして、共通して自分のことが嫌いです。劣等感いっぱいです。そして自分のことが嫌いな子は、他人も好きになれません。(P16. 17. 18)

桑村小学校では、本校の教育活動の特色を生かしながら1年生は1年生なりの2年生は2年生なりのそれぞれの発達段階に応じた「自律」する子を育てたいと思います。そして、自分の良さを自分自身が感じる「自己肯定感」を高めていきたいです。

温かな1年生の授業風景

1年生の授業風景です。子供たちの表情がとても柔らかだと思いませんか？担任の江川教諭の笑顔もとても輝いています。本校では、子供の学びに寄り添うことを授業の柱に位置づけています。

子供たちの思いや考えを教師のねらった意図と異なるからという理由で否定するのではなく、子供一人一人の思いに寄り添い、共に考えるのです。こうした授業を積み重ねてきた1年生は、安心して授業に参加することができます。なぜなら、大好きな江川先生がわたしたちを大切に見守ってくれているから、自分のもっている力を思う存分発揮しようとするのです。

こうした授業風景は、第1学年の教室だけでなく全ての学年の教室で見られる光景です。

さて、そこには魔法の言葉が隠されています。

この著書に記述されている「子供に自己決定を促す『3つの言葉』」がそれにあたります。



【1年生の授業の様子】

子どもに自己決定を促す「3つの言葉」

麴町中学校では「3つの言葉がけ」と呼んでおり、子どもに何かトラブルが起きたとき、全教員がその対応方法の指針としているものです。（中略）

- 1 「どうしたの」（何か困ったことあるの？）
- 2 「君はどうしたいの？」（これからどうしようと考えているの？）
- 3 「何を支援してほしいの？」（先生に何か支援できることはある？）

※本読書通信1月10日号で紹介したものと同じです。

これは全国の学校や家庭、職場ですぐに使うことができます。（P91.92）

桑村小学校では、生徒指導への対応だけでなく、授業でも子供たちに寄り添う手段として、上記の言葉掛けに心がけています。

授業中に困っている児童が「先生…」と呼んだとき、自分の「解」を押しつけることはしません。子供が今、何に対して困っているのかを言語化するのです。でも、これがなかなか手強いのです。何に困っているのかが分からない場合が多々あるのです。そこで、教師は子供の声にじっくり耳を傾けるのです。そう写真にある江川教諭の聴く姿勢に現れているように、子供にしっかりと寄り添うのです。子供の表情は、ここですっと変わります。悲しい表情から変じて明るい表情になるのです。次の「これからどうしよう」という言葉掛けで、子供は安心して自分の力を発揮しようとしめます。学習の場面では、ここまできたら3は必要ありません。問いに対する解決方法が見出せたら子供に任せるべきです。それが「自己決定」であり、「自律」です。

これからも「自律」の育成を大切にした授業を継続していきたいと考えます。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」（1月13日号）を読んだ感想

（ ）年（ ）